

いてはきわめて不完全なものであった。というのも〈郊外〉の住人たちは、一方では確かに隣人たちとの〈共同〉から解放されてはいたものの、今度は「カイシャ」と「カゾク」という場が、「二四時間戦う」ことを余儀なくされる濃密な〈共同〉の場となっていたからである<sup>(119)</sup>。前述のように、彼らは「〈ユーザー〉としての生」の“お気楽さ”を知ってしまった最初の世代の人々であった。それでも彼らが「カイシャ」や「カゾク」といった場で、〈共同〉の負担に耐えることができたのはなぜだったのだろうか。おそらく「第三期」には、たとえすべてが「虚構」めいた出来レースのように思えたとしても、目の前の理不尽さに耐え、人並みに努力さえしていれば、いずれはすべてがなるようになるといった素朴な安心感が未だに残されていた<sup>(120)</sup>。言い方を換えれば、揺らぎ始めてはいたが、人々は自身が所属する人間社会を未だに信頼していたのであり、そこで接する身近な人々に対しても素朴な信頼を保っていた。それは【第八章】において、われわれが「集团的に共有された人間一般に対する〈信頼〉」、加えて「共有された意味に対する信頼」と呼んできたもの、長い年月をかけて人々が築き上げてきた、ひとつの消極的な〈信頼〉の形に他ならない<sup>(121)</sup>。〈郊外〉に移り住んだ最初の世代の人々は、確かに「〈共同〉のための事実」を失っていた。それでも彼らは後の世代に比べれば、おそらくはるかに〈共同〉のための潜在力を保持していたと言えるだろう。とりわけ彼らが幼少期に〈生活世界〉での〈共同〉を経験し、そこで図らずも「〈共同〉のための意味」や「〈共同〉のための技能」を培ってきたこと、それは彼らが成長して〈ユーザー〉となっても、〈共同〉を再開できる余地がはるかに大きいことを意味していたからである。

### (5) 「情報世界」の台頭と〈漂流人〉の出現

続いて見ていく「第四期」は、日本経済が低迷していくなかで、世界的な情報化とグローバル化が進展した期間(1995年-2010年)である。そしてそれは2020年基準で言えば、若年世代にとっては両親の時代、そして多くの人々にとっては自らの“過去”として記憶している時代でもあるだろう。

その時代の外観は概ね次のようになる。まずそれは、日本社会がこれまでの社会モデルを立て直していくことから始まった<sup>(122)</sup>。繁栄と成長の時代が終焉したことは誰の目にも明らかとなり、ポスト「五五年体制」のための政治改革<sup>(123)</sup>、そして「小さな政府」、「民間活力」、「規制緩和」などを謳った「構造改革」が進められていった<sup>(124)</sup>。急速に普及していく情報技術は、労働、流通、消費、産業、コミュニケーションなど、社会のあらゆる局面を激変させていくことになる。世界ではグローバル化によって、人、モノ、カネが海を越えて行き交うようになり<sup>(125)</sup>、同時に無差別テロという新たな脅威が出現するようになっていた<sup>(126)</sup>。「リーマン・ショック」もまた、膨張するマネーが实体经济を破壊する脅威となることを印象づけた事件であった<sup>(127)</sup>。そうしたなかで、日本社会は未だ暗雲に包まれていた。一定の経済的再建は図られたものの、産業は空洞化し、企業福祉の切り詰めや非正規雇用の拡大が再び社会に格差をもたらすようになっていた<sup>(128)</sup>。少子高齢化の進行は社会保障費の増大に拍車をかけ<sup>(129)</sup>、結局慢性的な財政赤字があてもなく積み重ねられていった<sup>(130)</sup>。現在へとつながる不透明な時代は、このようにして始まったのである。

思想史的な文脈から見れば、「第四期」は総じて「変化と不安の時代」であった。繁栄によって覆い隠されてきたさまざまな矛盾が噴出していくなかで、社会には変化が求められていた。暗い時代にもかかわらず、変化の機運は人々をどこか活気づけてもいただろう。しかし誰もが先を見通せないなかで、人々は底知れぬ不安をも抱えていたのである。

この時代の代表的な思想のひとつは、新自由主義批判であった。市場の機能を重視し、国家の介入を最小限とすることを掲げる新自由主義は、このときすでに世界的な流行となっていた<sup>(131)</sup>。国際社会においても、多国籍企業や投資ファンドが勃興していくなかで、市場原理があたかも「正義」や「倫理」のごとくもてはやされていた<sup>(132)</sup>。とはいえその試みが、結局は富裕層や大企業からなるグローバル資本にますます富を集中させること、そして人間社会をますます市場の付属物に成りさがらせることになることを主張したのが、新自由主義批判である<sup>(133)</sup>。彼らは世界的な自由貿易化を批判しつつ、それと同じ論理によって、国内の「構造改革」にも批判の矛先を向けていた。彼らにとって、国

内で進められている行政サービスの縮小化や弱者の切り捨ては、世界を覆い尽くすあの新たな「帝国主義<sup>(134)</sup>」と深く連動したものとして理解されていた。そこでは、効率、成果、競争、自己責任が強調される傍らで、あらゆる人間社会の基礎構造が、資本の論理によって組み替えられていくとして批判されていたのである<sup>(135)</sup>。

こうして“市場”への嫌悪が高まるなかで、人々が活路を見いだしたのは新たな連帯の可能性であった。この時代、国際的に活躍するNGOが脚光を浴び、国内ではボランティア団体やNPOの存在が注目されていた。そして彼らが見いだしたのは、情報技術を駆使して意識を共有した人々が、国家行政とも営利企業とも異なる形で、自発的に問題解決に取り組んでいく姿であった。【第八章】でも見てきたように、彼らはそうした、行政的世界からも、市場的世界からも独立したアソシエーションのネットワークのことを、「公共性（圏）」とも、「新しい市民社会」とも呼んだ。そしてそこに新たなガバナンスの姿さえ期待したのである<sup>(136)</sup>。こうした「アソシエーション論」は、「ポストモダン論」に押されがちだった「第二次マルクス主義」を再び活気づけ、〈自立した個人〉の思想に新たな息吹を提供することになった。このとき彼らの脳裏にあったのは、「第二期」に規定されたあの“連帯する市民”の再来であるとともに、「第三期」に「自由な個性」と共同性の止揚として語られた人間的理想が具現化していく姿でもあったのである。いずれにしても、こうした文脈をも背景として、このとき「緩やかなつながり」や「開かれたコミュニティ」などが盛んに語られることになった<sup>(137)</sup>。それらは当時、人々に“もうひとつの社会”を連想させるだけの十分な力を持っていたのである。

そうしたなかで、「第四期」には「虚構の時代」に動揺する大人たちの姿を見て育った、新しい世代が出現していた。彼らが年長世代から受け取ったのは、「繁栄や享楽とは異なる新たな幸福の形を希求せよ」というメッセージである。すぐに捨てられる新製品よりも、使い込むことができる素朴な道具の方が良い。効率化された人工的な生活よりも、自然のリズムに寄り添った生活の方が良い。何かを多く所有することよりも、心が豊かに満たされていることの方が良い。そして人生に真に価値あるものとは、平凡で、何気のない、日常のほんのひと

ときのなかにこそある。要するにこうした「自然への回帰<sup>(138)</sup>」、「生活への回帰<sup>(139)</sup>」、それこそが、ここでは時代の先端を行くひとつの思想となっていたのである。

そして新たな世代が受け継いだのは、何よりも「かけがえのない個人」と「自由な個性」とをめぐる思想であった。「存在論的抑圧」からの解放、「自由な個性の全面的な展開」こそが人生の果実だと教えられてきた人々にとって<sup>(140)</sup>、社会が定めた“ルール”や“建前”ほど馬鹿げたものはなく、組織の歯車となって生きることほど空しく思えるものはなかった。人は誰しも平等に、また無条件に尊重されるべき存在であって、自分だけの“夢”を見つけ、好みや才能を生かした天職に出会うこと、そしていかなるときも自分らしくいられること、それこそが何よりの理想だと考えられた。誰もが「世界に一つだけの花<sup>(141)</sup>」であるところの「本当の自分」を求めた時代<sup>(142)</sup>、それはまさしく「自己実現」という言葉が最も花開いた時代だったと言えるだろう<sup>(143)</sup>。

ところがこうした社会にあって、多くの人々が同時に底知れぬ不安にも苛まれていた。それは前述したように、変わりゆく時代が、同時に不透明なものだったからでもあるだろう。縮小するセーフティーネットや拡大する格差のように、このとき確かに人々の抱える経済的リスクは増大していた。しかしここで“不安”がそれにとどまらなかったのは、それが何よりも“存在不安”という形において語られてきた側面があったからである。とりわけ「第四期」の後半になると、少なくない人々が自身の“居場所”をめぐる苦しみ、「承認不安」とも呼べる事態に直面するようになっていた<sup>(144)</sup>。秋葉原で無差別殺傷事件を引き起こした犯人が、上辺ばかりがはびこる世界で、自身が誰からも見られていないことをその動機として語ったことは、人々に衝撃を与えただろう<sup>(145)</sup>。新時代に語られた理想の多くは、このときすでに色褪せつつあった。そしてその跡地には、「諦め」という、広大で、不毛で、とりとめのない心の荒野だけが残されることになるのである。

さて、こうした時代を背景として、「第四期」における〈生活世界〉の実態とはいかなるものであったのだろうか。明確に言えることは、この時代に〈生活世界〉の構造転換が着実に進行していったということである。例えばこの時代、

かつての〈郊外〉的な「カイシャ」と「カゾク」の枠組みは、すでに過去のものになりつつあった。企業福祉の縮小と雇用の流動化が進められていくなかで、「カイシャ」は〈共同〉の場というよりも、純粋な営利組織としての側面を先鋭化させていた。男性ひとりで家族全員を扶養することが困難となり、女性の社会進出が大幅に進んだ結果、従来の性別役割分担の合理性もまた急速に失われていった<sup>(146)</sup>。しかしそうしたことによって、男性も女性も等しく独立した〈ユーザー〉となって生きていく時代が、まさに幕を開けることになったのである<sup>(147)</sup>。

そして、この時代に“情報技術”が確立したことは、まさしく〈生活世界〉を激変させる契機となった<sup>(148)</sup>。その意味を理解するためには、例えばこの瞬間にインターネットが消滅することを仮定してみれば良い。現代人にとって、それはおそらく蛇口から水が出ないことに匹敵する事態だろう。しかし「第四期」以前の時代においては、われわれは事実そうした世界を普通に生きていた。そしてそこに何の不都合もなかったのである。人々は当時、モノが欲しければ街へとくりだし、何かを調べたければ図書館や書店へと足を運んだ。そしてここでは誰かと対面して会話をすることこそが、最も身近な娯楽であるとともに、最も手軽な情報収集の手段でもあったのである<sup>(149)</sup>。インターネットが解体させたのは、まさしくそうした前提であった。そこでは“検索”という新たな行為が生まれ、空間を越えた“出会い”が半ば無限に可能となった。電話をかけることは特別なこととなり、ましてや直接誰かを訪ねるためには特別な理由が必要となった。それは「情報世界」という名の、〈社会的装置〉の“第三の歯車”が誕生した瞬間だったのである。

加えてこの時代、「第三期」の〈郊外〉的なものが、宅地を越えて全社会的に拡大していった。その象徴となったのは、この時期全国に建設された巨大ショッピングモールだろう。昔ながらの商店街は、その巨大な人工物の塊——郊外の広大な敷地に突如として出現したそれは、あらゆる商品と娯楽施設とを搭載した城塞のごときのものであった——によってますます衰退していった。しかしこうした土地から浮遊する人工世界が拡充すればするほどに、ひとりひとりの〈ユーザー〉にとっては、ますます「自由」が拡大するのである。そして人々には均等に機会が与えられ、抽象的な〈ユーザー〉という形でますます「平等」

が拡大していくことになる。いまや人々にとって、“住む”とは、この網の目のように張り巡らされた人工世界のなかで、〈社会的装置〉にぶら下がる自身の身体をどこに配置するののかということではなかった。実際「情報世界」を通じて無限に“つながる”ことが可能な時代に、たまたま身体の配置が隣接したからといって、なぜその人と関わりを持たなければならないのか。ここには〈共同〉していく必然性以前に、そもそも関係性を築いていく必然性がない。ここにおいて“地域社会”という枠組みは、完全にその実質的な意味を失ったと言えるだろう<sup>(150)</sup>。

ここで考えてみたいのは、こうした時代に少なくない人々が抱えていた、あの“存在不安”とは何だったのかということについてである。最初の手がかりとなるのは、「第三期」の人々がそうであったように、「第四期」の人々もまた、理想と現実のなかで分裂していたということだろう。

例えば新世代の人々は「自然への回帰」や「生活への回帰」を求めていたが、その理想の先にあったのは、「虚構」にまみれた「〈ユーザー〉としての生」を批判し、〈社会的装置〉に極力依存しないような生き方でもあった。彼らが「生きる実感」、「自給自足」、「人と人との絆」を口にするとき、そこで賛美されていたのは、皮肉にも「第三期」までの人々があれほど嫌悪した“昔ながらの暮らし”だったのである。しかしそれゆえ、そうした人々の多くは、一度は挫折を経なければならなかった<sup>(151)</sup>。彼らは〈社会的装置〉から“降りる”ためにはよほどの意志がなければならないこと、そして一番手軽な方法は、健康で裕福な人間が、それを“サービス”として購入することであるという逆説を知った。加えて何より、彼らは自由と自発性のもとで〈生活世界〉を実現しようと試みて、現実求められる〈共同〉の負担に愕然としたのである<sup>(152)</sup>。

こうしたことは、同世代の人々が求めた「自己実現」についても同様であった。「本当の自分」、「純粋な自分」を求めた人々にとって、「かけがえのない個人」は、いまや「自己実現」して然るべき「かけがえのないこの私」となっていた。しかし彼らが現実を目撃したのは、「就職氷河期」の渦中であって自身を拒絶する社会の姿、そしてあれほど憧れたフリーな生き方が「ワーキングプア」へと転落し、夢追い人が「派遣切り」や「ブラック企業」などによって食い潰

されていく姿でもあったからである<sup>(153)</sup>。だが、おそらく彼らはここで必ずしも“自己責任”ゆえに苦しんだのではなかった。そうではなくて、〈自立した個人〉として生きようとして、“自己責任”のもとで成功するはずだった「自己実現」に失敗したからこそ、おそらく彼らは苦しんだのである<sup>(154)</sup>。

とはいえ、この世代に生じた理想と現実の乖離は、実際にはより根源的な部分において生じたものではなかったか。それはこうした人々が、一方では「かけがえのないこの私」をあれほど信奉しておきながら、他方では「自己実現」の舞台となるはずの人間社会を、それどころか「自己実現」の当事者たる自分自身でさえも、根本的には信頼していなかったように見えるからである<sup>(155)</sup>。言ってみれば彼らは、現実によって裏切られる以前に、心の奥底において、それが無残に打ち砕かれるだろうことをどこかはじめから予感していた。つまり理想が求める自己存在への過剰な期待と、それに対する根源的な不信感、あるいは裏腹の自己肯定感の低さゆえの歪な「諦め」の感情によって、彼らは最初から引き裂かれていた<sup>(156)</sup>。そしてそれこそが、おそらくこの時代の“不安”の根底にあるものだったのである。

ではなぜ「第四期」の人々は、こうした「諦め」の感情にこれほど囚われなければならなかったのだろうか。おそらくその手がかりは、彼らの多くが〈郊外〉に生まれ、〈郊外〉的なものに囲まれて育った人間であった、ということにある。彼らが生まれ育った世界の風景、それは前述のように〈存在の連なり〉から浮遊し、美しく無毒化され、コンセプト化され、パッケージ化された世界であった<sup>(157)</sup>。そこには臭くて汚い生物存在としての生身の〈生〉も、「集団的〈生存〉」の実現をめぐる求められる毒々しい〈生〉の姿も存在しない。彼らにとってリアルな世界とは、せいぜい人工世界に配置された自宅と職場（学校）、そして無数の商品とケータイ、PCの画面であって、その外部にはどこまでも果てしない虚無が広がっている。彼らはかつて、宮台真司が「仲間以外は皆風景」、「島宇宙」と呼んだ人々が成長した姿でもあった<sup>(158)</sup>。そこでは人々を広く背後で結びつけてきた“世間”の力学も、そして多様な立場や距離間を制御してきた従来の〈間柄〉も、意味あるものとしては現前しない<sup>(159)</sup>。言ってみれば無数に点在する仲間内だけが、そこでは意味のあるものとなるのである。

それゆえ彼らは、自身のいまある〈生〉の先に「意味のある過去」も「意味のある歴史」も見いだすことなく、また多くは〈共同〉を引き受ける大人たちの姿を目撃することもなく成長していく。そうした人々の内面に〈役割〉の概念が、あるいは「担い手としての生」を引き受けようとする動機が芽生えるはずもないだろう。決して「意味のあるもの」として現前することなく、「この私」を拒むかのような人間社会を、彼らが〈信頼〉できるはずもない<sup>(160)</sup>。そして無数の信頼できないもの、「意味のないもの」に囲まれて、どうして「自己への〈信頼〉」を——すなわち「意のままにならない」世界のなかで、自身の〈生〉を誇りあるものとして肯定していくことが——実現できると言うのだろうか<sup>(161)</sup>。

こうして“温室育ち”の〈ユーザー〉たちは、生きることの残酷さに直面してすぐに傷ついてしまう。自意識だけを肥大化させ、「この私」をめぐる浮遊した理想にばかり縋ってしまう<sup>(162)</sup>。しかし彼らは、同時にそれが張りぼてに過ぎないことを良く知っているので、自己存在に底知れぬ不安を抱えることになるのである<sup>(163)</sup>。そしてその不安を解消しようとして、彼らは他者からの“承認”をひたすら求めてしまう。しかし彼らが渴望するのは「この私」の無条件の承認であるために、その試みは結局挫折を余儀なくされるだろう<sup>(164)</sup>。そして彼らは「誰も本当の自分を分かってくれない」といって、虚無に似た「諦め」にどっぷりと浸りつつ、その感情を誰に向けるでもなく「情報世界」へと流出させていく。それでもその純潔な心は、いまでもここではないどこかを密かに夢見てもいるのである<sup>(165)</sup>。

さて、本書では、これまで見てきた〈郊外〉生まれの人々を指して〈漂流人〉と呼ぶことにしよう。かつての〈旅人〉たちが、〈故郷〉という名の「母港」を後に大なる「目的地」へとこぎ出した船だとするなら、〈漂流人〉は、はじめから帰るべき「母港」も、向かうべき「目的地」も、あるいは自身の立ち位置を確認するための「羅針盤」さえも失った漂泊船のようである<sup>(166)</sup>。想像してもらいたい。目の前には、どこまでも広がるどす黒い人工物の波と、彷徨い続ける自分自身の船だけがある。水面の奥底に何があるのかは分からない。この水平線の先に何があるのかも分からない。自身がなぜここにいて、なぜ船がこ



うして浮かんでいられるのかさえも分からない。「どこに行っても良い」と言われても、行くべき場所がなければ、どこかに行くべき理由もない。そうした漂泊船が、いわば水面のあちこちに浮かんでいるのである。「かけがえのないこの私」など、虚無のなかに聳え立つ蟹気楼のようなものではないか。彼らが「無気力」、「無関心」、「卑下」、そして「諦め」という病に苛まれているとするなら、それは彼らが〈存在の連なり〉との接続を絶たれ、〈存在の強度〉を著しく欠いているからだと言えるのである。

思えばこうした人々は、最初から〈ユーザー〉となって生きることを宿命づけられた人々でもあった。そしておそらく彼らこそが、〈関係性の病理〉と〈生の混乱〉に直面した最初の世代の人々であったと言える。〈故郷〉を捨てて〈郊外〉に定住したかつての〈旅人〉たちは、結果として、〈存在の連なり〉のもとで人が生きることの意味、そして「〈共同〉のための意味」と「〈共同〉のための技能」を次世代に伝えることはなかった。それゆえ、彼らの子どもたちは期せずして〈漂流人〉となった。〈漂流人〉は、〈役割〉を知らないし、〈信頼〉を築くことができない。そしていざ「〈共同〉のための事実」が現前し、互いに互いを必要とする理由が芽生えたとしても、多くはその試みに失敗することになるのである。

## (6) 〈自己完結社会〉の成立

最後に見ていく「第五期」は、「第四期」以降の期間（2010年-）、すなわち2020年基準で言えば、われわれが生きる“現在”である。ここで生じている数々の事態が何を意味するのか、また後にわれわれに何をもちたらしことになるのか、そのことはまだ誰にも分からない。

例えば「第四期」に衰退した日本経済は、「第五期」に至って好転したと言えるのだろうか。統計資料をもとに「アベノミクス」の成果を主張するものもあれば、それが見せかけの砂上の楼閣に過ぎないというものもあるだろう<sup>(167)</sup>。政権交代を遂げた民主党政権が3年あまりで瓦解して以来、野党の支持率は低迷し、自民党による一強体制はかえって盤石になったようにも見える<sup>(168)</sup>。こ